

01-049

医療系大学生の性の健康学習経験の現状

広瀬 京子

東京医療学院大学 保健医療学部 看護学科

【背景】

ここ最近、大学生による性犯罪が報道され、妊孕性の高い世代の性感染症による不妊という現実も取りざたされている。一方、将来の妊娠に向けた健康づくり「プレコンセプションケア」がWHOで推奨されている。医療の対象となる人々の、性の健康支援に関わる可能性のある医療系大学生は性の健康をどのように捉えているのだろうか。

【研究方法】

1)方法：医療系大学生の入学前の性に関する学習経験や「性の健康」等について、自由記載項目を含めた無記名自記式の調査票による調査研究2)対象：医療系大学生495名3)倫理的配慮：調査に先立ち調査票の協力について学生に不利益を被ることがないこと等を説明し、調査票の提出をもって同意とした。所属大学の倫理委員会の承認を得て実施した。(承認番号：17-03H)

【結果】

回答は320名(回収率64.7%)1入学前の性に関する学習経験は、(1保健科目(303名)、2特別講義(48名)、3理科系科目(45名)等であり、性の情報入手については、男性1インターネット、2友人、3DVD等、女性は1友人、2インターネット、3教科書・専門書等であった。受けたかった教育内容は上位から男性は性感染症、性行為、愛情について、女性は子宮がん、性感染症、ジェンダーであった。2「性の健康」の捉えについての自由記述については176名(55%)から52データ、14サブカテゴリー、5《カテゴリー》を抽出した。1《愛を基盤とした性の重要性の認識》2《自分の性に向き合うこと》、3《自分を守り、相手を守る健全な性行動》4《性をポジティブに考える》5《性における多様性を尊重する》

【考察】

性に関する情報収集は男女間で差が認められ、正しい情報の理解や知識の獲得ができていないか危惧される。受けたかった教育内容に関して、女性は子宮がん、性感染症など予防できる内容やジェンダーが上位なのに対し、男性は性感染症、性行為等が上位を占めており、男女間で差異が見られた。特に、性感染症の具体的理解不足があるのではないかと推察される。性感染症は妊孕性の高い世代が罹患した場合には母子感染として次世代に影響が及ぶという重大な問題が潜んでおり、正しい知識と予防、罹患した場合の早期発見と早期治療の重要性を学修することが求められる。大学入学前の性に関する学習経験は多様であり、高校から大学へ移行する導入として初年次教育などで性の健康学修の必要があるのではないかと考える。